

名作再読、拾い読み (27)

『さようならコロンバス』 ("Goodbye, Columbus")

小澤 文彦

フィリップ・ロス (Philip Roth, 1933-) は、ソール・ベロー、バーナード・マラマッドと並ぶユダヤ系作家の一人で、ニュージャージー州ニューアークの東欧系ユダヤ人移民の子として生まれました。バックネル大学を卒業し、シカゴ大学で文学修士号を取得します。陸軍で2年間兵役を務めて除隊後、再びシカゴ大学の大学院へ入り、短期間作文の指導をしました。その後、アイオワ大学とプリンストン大学で創作を指導し、ペンシルベニア大学では比較文学を講義しています。

1959年に『さようならコロンバス』で作家デビューし、『ルーシィの哀しみ』(1967)に次いで発表した『ポートノイの不満』(1969)はベストセラーになりました。その後も旺盛な執筆活動を受け、多くの作品を発表しています。全米図書賞を2回受賞し、全米批評家協会賞も2回受賞、ピューリッツァー賞は1998年に受賞しました。

今回は『さようならコロンバス』を紹介します。青春が眩しく感じられるような瑞々しさに溢れたストーリーです。

地元のカレッジを卒業したニールは叔父夫婦の家に下宿しながら図書館で働いています。会員制のプールに居た時に、ブレンダから眼鏡を持っていて頼まれたことが切っ掛けでブレンダと付き合うようになりました。夏の間、毎晩水泳をしたり、散歩をしたり、ドライブに行ったりして楽しく過ごします。彼女の両親は貧しいユダヤ人街出身でしたが事業に成功して今は高級住宅地に住んでいます。ブレンダの父親が経営する工場が建っている場所は、昔はユダヤ人貧民街でしたが今は黒人が多く住み着いている地域でした。ニールにとってそこは祖父母を思い出す懐かしい地域です。ブレンダはボストンの名門女子大学に進学し、ユダヤ鼻を整形しています。ブレンダの提案に両親の許可が出て、ニールは彼女の家で8月末の1週間を過ごすことになりました。丁度その頃、ブレンダの兄の結婚が決まったので、結婚披露宴が終わるまでニールはもう1週間滞在を延ばすことができました。愛し合いながらも、ニールは所々で感情の擦れ違いを感じ、結婚したいという言葉を出す勇気が湧いてきません。夏休みが終わってブレンダはボストンの寮に戻りました。秋になり急激に寒くなり始めた頃、ニールはブレンダが恋

しくなります。ユダヤ教の祭日が近付いてきた時、彼はブレンダに呼び出されてボストンに会いに行きました。いつもと様子の違うブレンダが口にしたのは、家のタンスの引き出しに置き忘れた避妊具が母親に見付かって、両親から怒りの手紙が届いたということでした。ニールはブレンダの不注意をなじり、言い争いになります。最後に、二人とも「愛していた」と言う言葉の口に出して、お互いに過去形で言ったことに気付いた時に、この恋は終わりました。

ニールの叔母の変人的言動、ブレンダの叔父が酔っ払って話し掛けてくる与太話、図書館にゴーギャンの絵を見に来る黒人少年の動作などがコミカルに描かれていて、読後感はちょっぴりほろ苦いけれども爽やかです。

これは階級差のある男女の恋物語として味わえる小説ですが、この中で描かれているユダヤ人に関心を向けると、かなり根の深い問題だということに気付かされます。

19世紀から20世紀初めにかけて多くのユダヤ人が東ヨーロッパやロシアからアメリカに移住してきました。その中から成功した人と成功から取り残された人との階級差が生じ、住む場所も高級住宅地と環境劣悪な下町とに分極化していきます。他民族からの迫害を受け続けたユダヤ人達は、ユダヤ教の戒律を厳しく守りながら結束力を強めて集団生活を維持してきたのですが、アメリカに移住して暮らし始めてからその戒律に反抗したり無関心になったりする人達が出てきました。アメリカの文化に同化していくか、ユダヤ人としてのアイデンティティーを維持していくかという問題に悩む人も出てきます。性に関しても、自由なアメリカ社会と戒律を厳格に守るユダヤ人家庭という生活習慣の違いが描かれており、この小説ではストーリーの中に時代背景がきちんと織り込まれているということが理解されるでしょう。

参考文献

1. Philip Roth "Goodbye, Columbus and five short stories" (Vintage, 2006)
2. フィリップ・ロス著 佐伯彰一訳『さようならコロンバス』(集英社、1969)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)